からしだね

2020年10月号
(563号)

キリストの受難 カトリック池田教会
主任：ノノイ・プラザ神父
住所： 〒563-0041　池田市満寿美町9－26
TEL ： 072-751-2400　FAX：072-753-4624
URL(ホームページ)：http://catholic-ikeda.sakura.ne.jp/church/index.htm

本号の記事の主題など

巻頭言：染野治雄神父による
「すべてのいのちを守るために
想像から創造へ」
おかえり池田教会－耐震工事竣工して
(耐震委員会だより その3)

みんなの談話室
「フランシスコサレジオ大山利郎さんに感謝する」(2編)、「谷掛さんのこと」、
「アシジの聖フランシスコ谷掛晴美さんの生涯」
10月の年間行事予定の変更･追加
今月の表紙写真について
典礼委員会からの注意喚起のお願い

すべてのいのちを守るために　想像から創造へ

染野治雄神父

日本の司教団は、毎年9月1日から10月4日を「すべてのいのちを守るための月間」とすること定めました。この号が届く頃にはすでに期間は終了しているかもしれませんが、その趣旨を理解し行動に移すことは「月間」に限られたものではありません。いつでもこの「月間」のことを思いめぐらして行動できるようにすることは大切なことです。

ところで、この月間に先行してすでに「被造物を大切にする世界祈願日」（9月第1日曜）がありました。また今年は回勅『ラウダーート・シ』発布５周年にもあたり、これにさらに昨年のフランシスコ教皇来日のテーマ「すべてのいのちを守るために」も考慮にいれた、より広い意味での生きとし生けるものすべての命のゆりかごである環境・自然を保護し、大切にし、これを与えてくださった神に感謝しようという、たいへん欲張った内容の取り組みを目指しています。ただし、司教団文書では「環境保護」に主眼を置いたものになっており、大阪教区でもこの司教団文書に基づいた取り組みを推奨しています（『大阪カトリック時報９月号』参照）。

環境保護・エコロジーを考え、行動を起こすことはもう何十年も前からの課題であり、いまさら説明の必要もないでしょう。ところが、実際の行動になると、それは様々な立場の人々の利害がからむ複雑な課題となってそこから新たな分断が生まれている有様です。“自分の正義”どうしが対立している状態です。「わたしたち」という言葉自体が分断を促しているともいえます。そんな中で一番はじめにしわ寄せをうけるのは社会の谷間に置かれた人々です。人間だけでなく動植物も含めてです。環境破壊が“わたしたち”の便利で快適な生活によってもたらされているとすれば、便利で快適な生活から最も遠いところにいる“わたしたち”が最初に不利益を被ることは、不条理の最たるものです。

このような対立と分断の背景にあるのは「想像力」の欠如ではないかと思います。環境に配慮することも、弱者に寄り添うためにも“想像力”が必要です。わたしたちの行いが他者にどのような影響を及ぼすのか、また社会の谷間にいる人々の声なき叫び声に、そして地球が発している悲鳴に耳を傾けるためには想像力が必要です。想像力を働かせるためには、まずもって出ていかなくてはなりません。自分の場所に閉じこもっていては人々の声なき声は聞こえません。想像力を養いよく働かせるためには心を開き、人と人との交わりの中へ出てゆかなければなりません。それは自分の利害から出て行くことでもあります。出て行き、想像力を働かせれば、あわれみの心が生まれます。「憐れみ」とは調べてみると、「他者の不幸な状況に共感する感受性、自己放棄を伴う自発的な愛の行為」（岩波キリスト教辞典）と書いてあります。他者への共感は想像力から生まれます。使徒パウロがいう「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」（ロマ書12.15）というときの心です。じっさい、イエス様の多くの行いもその「深く憐れまれる」（マタイ9.36など）、おなかの底から出てくる共感の心から出たものでした。それは、なによりも神ご自身が人々の苦しむ姿をご覧になり、叫ぶ声をお聞きになり、いてもたってもおられずに、自ら降りて助けの手をさしのべてくださるお方であること（出エジプト記3章参照）をお教えになるためでした。

神様は天地創造によってこの世界万物を良いものとしてお造りになりました。そしてご自分の造られたこの世界を、造ったまま自然任せに放っておかれる方ではありません。良いものとして造られたこの世界が、さらによいものとなるように望まれ、今も働いておられます。とりわけ、ご自分の似姿に造られた人間を愛され、いつくしみ、すべての人が幸せになるように今も働いておられます（ヨハネ5.17）。すなわち、神様はあわれみのみ心によって、今も創造のわざを続けておられるのです。

このようにして想像力からいつくしみの心が生まれ、いつくしみによってこの世界にはいまも創造のわざが続けられているのです。想像力（イマジネーション）と創造力（クリエーション）は切り離すことができない関係にあるといえましょう。こうして、わたしたちも自らの想像力を養い、神の創造のわざに参加するように神様はお望みになるのです。

人間の自己中心によって人と人との絆が分断されて、自然は破壊され、そのはざまで多くの人々、また地球自体も苦しみの声を上げています。そういう世界へ、すべての人が神の愛による新たな秩序の創造に参加するために出て行き、すべてのいのちが大切にされる世界へ変えられて行くこ

とを神さまは待っておられます。もっとも、いまの世界の状況は、わたしたちが出て行くことを困難にしています。しかし同時に新たな交わりの手段も発達しています。この手段を上手に使うこともまた大切なことになるでしょう。

おかえり池田教会 - 耐震工事竣工して　(耐震委員会だより　その3)

耐震委員･総務委員

左：天井からの反射光と空調ダクトに遮られずに室内は明るい。
上：聖堂入口も広くなり、すっきり。

4月27日（月）に着工した「カトリック池田教会耐震改修工事」は、8月26日（水）工事を担当したコーナン建設からの引き渡しを以て無事完了した。

振り返ると、新型コロナウイルス感染症の影響で4月12日（日）の復活祭ミサが中止になり、聖堂を使う予定がなくなったため、復活祭後に行う予定であった聖堂ベンチ等のカール記念館引っ越しを前倒して4月11日（土）実施。しかし実際にカール記念館に移設された仮聖堂で池田教会のミサが再開されたのは、政府による「緊急事態宣言」が解除された5/30（土）からであった。工事開始以降、長らく聖堂はバリケードに閉ざされ、池田教会の信徒にとって謎であった聖堂の様子が明らかになったのは、8月29日（土）のミサからであった。

前とあまり変わらない？

恐らく「あまり変わらない」という印象を持たれた方が多かったのではないだろうか？もしそうであるなら「耐震工事は成功だった」と言えるかもしれない。耐震工事を終えた建物が、耐震性能を高める目的のみを達成し、無骨な筋交いが日常の視界を占め、空間が台無しになるのを皆さんもご覧になったことはないだろうか。

私たちにとって、祈りの場の改変は、まるで肌着のように小さな違和感さえ耐えがたい。今回設計者に、この点をご理解頂けたことは大変有難かった。耐震改修を担当頂いたN2設計は、「信徒が祈り慣れた場」と「聖堂が元から持っている優れた点」を認め、出来る限りそのままの姿で、耐震性能を強化する意図を持って設計に当たってくれた。

昼間の北面。上部の窓枠外側に寝かした梯子型の鋼製構造物を設置したから、床近くのガラス戸が光･風を通す。ここでも建築当初の姿が保たれた。

聖堂の新生ポイント

では、何が変わったのか？とうにお気付きの点も多いと思われるが、素敵になったポイントを改めてご紹介したい（今回主に耐震性能以外について述べたい）。

まぶしい外光：まず何と言っても明るくなったと思いませんか？東側（法務局側）のステンドグラスのカラフルさ楽しんで頂きたい。ガラスを入れ替えたのか？と疑いたくなるが、確かに大阪北部地震で一部ひび割れした箇所は交換しているが、建築当初のガラスを元の場所に戻す施工だ。実はこれまで、ガラス表面に長年のローソクのススが蓄積して、グレーにくすんでいたのを、薬剤を使って洗い流してくすみを落とすことができたと施工者から聞いている。また南面（幼稚園側）の明かり取りは、これまで空調機のダクトで塞がれて、窓の意味が無いほどだったが、ダクトが外され、飛散防止フィルム張りのガラスに全て入れ替えられました。こちらも聖堂の天井が浮き上がるような明るさが感じられます。

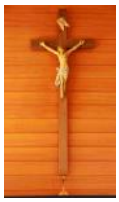
空調機：従来の空調は、聖堂東側に増設された空調機械室で温度調整された空気を、大屋根下に這わしたダクトで天井付近から堂内に送り、天井扇で撹拌する方式。これを廃して堂内に空調機を4台新設。2台は聖堂後部左右に露出するので容易に発見できますが、残る2台は説明されなければ分かりにくい。1台は小聖堂の祭壇に近い箇所に格納されている（空調機の奥は物置が新設された）。そのため小聖堂は若干狭くなっている。最後の1台は更に発見難易度が高い。なんと香部屋に本体が仕込まれ、祭壇床に近い開口から風を送って壇上の冷暖房を担当する。特に夏場、重ね着を強いられる司祭の暑さを少しでも軽減できればと新設された。

4台の空調機はそれぞれ独立しており、リモコン操作でオン・オフするので消し忘れに注意したい。その際、最近の空調機は電源を切ると即停止せず、しばらく動作を続けて機器の清掃を行っている様なのでご承知おき下さい。

左：手洗いと便器がある。右：洗面台、手洗い、便器、赤ちゃん用の脱衣台などがある。

トイレ：2カ所のトイレは、男女に関係なくぜひ開いている方を使って頂きたい。洗面からは温水が出るので、冬でも手洗いを励行したい。またトイレと廊下の照明は、人感センサーで点灯するので、一定期間センサーが動作を検知しないと消灯してしまう。そんな時は慌てず天井めがけて手を振って、センサーに合図を送って頂ければ、再び点灯する。

告解室：壁・床・天井の内装が全て新しくなった。照明が特徴的なので、ゆるしの秘蹟を受けられる際、気が散らない程度にご確認頂きたい。



小聖堂：繰り返しになるが若干面積が狭くなった。かつてトイレ側にあった旧告解部屋を改造した2カ所の物入れは、1カ所が廊下に面した掃除用具庫と一体化したため、小聖堂に面した倉庫としては1カ所のみ残る。その代わり、小聖堂祭壇左側の壁に扉が設けられ、大きめの倉庫が新設された。また小聖堂の照明スイッチは、もともと小聖堂祭壇右側にあって分かりにくかったが、小聖堂入り口の廊下に移設された（照明はLED化した）。畳も新しくなったので小さい子も安心です。

「耐震委員会だより」最終回は、聖堂の新生ポイントを皆さまにご紹介させて頂いた。耐震改修工事においては、委員の一人として池田教会の皆さんに感謝の気持ちをお伝えしたい。

祈って下さった方、我々委員に何も言わずにお任せ下さった方。助言を下さった方。ご寄付頂いた方。私たちのノノイ神父様。財務の方。休日をつぶして働いて下さった方。必要な人を送って下さった神さま。御受難修道会。ご近所。竣工後水やりをして下さっている方。納骨堂の皆さん。本当に有難うございました。皆さんのおかげでコロナウイルス感染症の混乱を乗り越えて、私たちの希望ー稲葉善章新司祭の叙階式に間に合いました。

神に感謝。

※池田教会の歴史として記憶に留めておきたい事柄が幾つかあるので、機会があれば忘れないうちにご紹介したいと思います。

上：日暮れ時には聖堂の内部照明が漏れる東面（左）と北面（右）。
左：聖堂の南面壁が４本の構造補強材で補強された。補強材は地面に埋め込まれたコンクリートの上に固定されている。

みんなの談話室　　四編

フランシスコ･サレジオ大山利郎 さんに感謝する

Y.O.

大山さんはからしだねへたびたび寄稿してくださった。からしだねを作る側としては、ありがたい、かけがえのない存在だった。信仰についての深い思いをご自分の暮らしの中に落とし込んで、ユーモアをまじえつつ語られたので、いつも楽しく読ませていただいていた。

そんな文章の達人に向かって、いろいろと疑問点を質した。たいていは、校正はお任せしますと、とおっしゃってくださったが、あるとき、ご自分のことを杖をつきつつ「ボトボト」歩く、という表現をされたので、「とぼとぼ」ではないのですか、と尋ねたところ、これは「ボトボト」です、ときっぱりと言われた。聞きなれない表現だが、なるほど、大山さんのイメージは「ボトボト」だな、と妙に納得した。最後の原稿でもやはり、「ボトボト」と書いておられる。ご病気でしんどいはずなのに、お会いするたびに魅力的な笑顔を向けてくださった大山さん、私とは短いお付き合いでしたが、楽しい思い出がいっぱいあります。信仰に関するさまざまな情報も折に触れメールで送ってくださって、ありがとうございました。

T.O.

されじお大山利郎さんを池田教会でお見掛けした時は、いつも活動的に祈る方だった。初めてお会いして言葉を交わしたのは共に老齢期に入って互いにそのことを渋々ながら受け入れ始めた頃であって、時間に追われがちな勤務から解放され、別な日常生活の仕方を手さぐりしている状態だったせいかもしれない。大山さんの勤務は新聞文化欄を担われ、ご家庭では大家族の頭領であったと聞くから、自然科学の領域にある蛸壺に埋没した私とは異なって、「人間である自分たちは神、イエス･キリストに救済していただくので、そのためには聖書を読み、聖人たちの言動を参考にしなさいと、信仰を深め、それには日々の祈りが大事です」と厳然と言明されたのを覚えている。しかし、私も手さぐりで始めた“からしだね”の編集に悩んでいたので、私は迂闊に「教会新聞“からしだね”の編集は全くの素人だから、現在の新聞編集の方針について意見を聞かせてくれ」と話題を振ろうとしたら、「主日のミサばかりでなく、朝のミサなどにも出るように！」と一歩も譲らない。正鵠を射た、遠慮ない指摘に二の句を出せなかったのを覚えている。8年ほど前のことであった。

５年ほど前であったろうか、大山さんは漸く私の信仰が迷走しているのに気づかれたらしく、季節の挨拶がてら年に2, 4度他愛ない話を書き送って来られた。ところが、今から3年前（２０１７年）の初夏に突然、丁寧な長文の原稿を広報委員だった私に送付された。それらの「からしだね」５２８号（６月号）に掲載された「大腸ガンの手術を受けて（上）」とそれに続く「中」と「下」には率直に著わされた大山さんのイエス･キリストへの祈りが多くの方々の心を揺さぶった。この中に、壮健で頑強な身体の大山さんにとってガンの宣告されたのに予め気づかずに短い余命の宣告を教会新聞に告白するのに躊躇しなかった。私はただならぬことが起きたのを知った。それ以降の計１０通の寄稿文はそれからの生き方の記録を私のような凡夫に命とは何かを伝えようとするものとなった。読む者の身心の奥に届き、時には笑いや悲しみを誘うこともあった。

その直後に「死の準備」（聖アルフォンソ･リゴリオ著、岳野慶作訳、中央出版社刊）の36章ある第７章（64p ~ 88p）までをA4用紙にハード･コピーを撮って、製本されたのが大山さんから郵送されてきた。その第6章 “罪人の死” の要点には「罪びとは突然死ぬ。そうでなくとも、回心は、きわめて困難である」とある。以来、その冊子は私宅の本棚ではなく、ベットから手が届く場所に積まれている。

本年1月に私自身が手術前検査で大腸カメラ撮影のために訪れた池田市立病院の廊下でばっ

たり会った大山さんはやさしい眼差しを保って「もうガン切除手術は受けられない」と主治医の宣告を語りだされたが、「以前と変わらぬあなたはそう見えないよ。また、お会いしましょう」と応え、別れた。

その後のコロナ禍でカトリック池田教会の主日ミサが91日間も開かれていない間に2つの投稿をいただいた。一つ目は3月に発行された“からしだね”号外に掲載された原稿では、主に対面するミサの代わりを見つける難しさを挙げて、公開ミサが再開されるのが一日も早く来ることを願われていた。６月に戴いた遺稿となったのは最も感銘深いもので、“からしだね”５６２号（８月・９月合併号）に「されじお大山さんの遺稿」として掲載された。折しも、教皇フランシスコの説教の内容と重なり、掲載までに５０日も要した間に病身の大山さんは２回も手直しを加えられたが、大山さんの主への信仰は揺ぐことはなく、祈りを一層深められていた。その一節を紹介しよう。創世記25章に登場するヤコブが同32章で生誕地に帰る前に神との『格闘』を経験し、傷付いた後に祝福を受けたと記された後で、「もし、自分にも『格闘』という経験があるとすれば、それはガンの手術だったな」と述懐された。

7月22日に池田市立病院で抗がん剤を投与された直後に院内で歩行中に突然倒れるまで、土曜の夕刻のミサに与って神へ祈り続けたのを忘れることはできない。また、お会いするのを願って！

谷掛さんのこと

直谷掛さんが帰天された。大山さんの知らせが届けられたとき、なんだか嫌な予感がしたのだが・・・わずか数日後に今度は谷掛さんの訃報を聞くことになるとは思わなかった。さびしい。谷掛さんとは新聞のことでしばらくいっしょに仕事をさせていただき、わたしが教会を離れたあとは、孤軍奮闘、彼がながらく記事集めと編集を一身に引きうけられた。だから、わたしの頭のなかでは広報の先駆的功労者としての思い出が生きつづけている。職人気質の持ち主だった。慎重綿密な仕事ぶりで我慢強かったのである。あきっぽくて目移りしやすく、ややもすると根気が続かないわたしとは良いコントラストだった。

ふたりで仕事をしていた頃、おもわず苦笑させられたことがあった。すこし話したい。当時、編集と印刷は「キャノワード」というワープロ専用機をつかった。いまは懐かしいワープロ専用機だが、当時は（つまり昭和６０年頃になるか）どのメーカーもパソコンではなくて、ワープロ専用機を懸命に売りこんだ。まだＣＰＵの処理能力が低くコアメモリーもせいぜい「KB」単位でしかなかったと記憶する。そんな低能力機だったから入力するには二段階儀式が必要となる。

まずはプログラム・フロッピーディスクを二本あったスロットの上段に入れて読み込ませる。黄色いランプを点滅させながら、ワープロ将軍さまは「ウー、ウー、ガタゴト、ガタゴト」と３分間呪文を御繰り返しになる。そのにぎやかなこと。これが終わると、やっと文章ディスクを今度は下の段に挿入ロック。文章入力準備ようやく完了。ここまで来るのに５分。まあ、いまのスマートフォンの遠い御祖先さまだから、気位がたかくて、うやうやしい手続きを踏まないと言うことを聞いてくれないというわけである。

性能的にもいまは昔だった。あるとき、谷掛さんがニヤニヤしながら、刷り上がったばかりの紙面をもってきた。教会新聞紙面はいまもそうだが、Ａ４サイズ用紙上下左右の端に1cmばかり余白をのこして縦線と横線を引く。そして合計４本で大枠組をつくり、この枠組みのなかに記事を流し込む。ところがである、谷掛さんが「大発見」をした。不思議なことに、上下の横線と左右の縦線とでは太さが、あきらかに違っているではないか。０．数ミリの違いだった。この違いは、気になると嫌でも目立った。というのも、もともと線の太さは決めてあったから、知ってしまっても、どうにも変えられない。修正不可。機械サイドでプログラムミスがあったのだろう。わたしは全然気がつかなかった。たしか谷掛さんはあのとき、キャノンに申し入れる、と笑っていたように記憶する。その後どうなったのだろう。いちど谷掛さんに聞いてみたいと思っていたが、その機会もないままお別れとなった。

天国でワープロ専用機時代について、ふたたび谷掛さんとうんちくを傾ける楽しみが増えたことになる。合掌。

アシジの聖フランシスコ谷掛晴美さんの生涯

広報委員会

谷掛晴美さんは昭和11年に大阪市北区天満で4人兄弟姉妹の3番目の子供として生まれました。間もなく谷掛一家は幼い晴美さんを連れ、満蒙開拓団として満州へ渡りました。しかし終戦となり、状況は一変したのです。一家は食料も持たず着の身着のまま、追剥、強盗を恐れながら徒歩や汽車を乗り継いで帰国の途につきました。その悲惨な道中の間に、祖母や父母、兄、妹が命を落とし、無事日本の土を踏めたのは、孤児となった姉と晴美さんの二人だけでした。姉弟は長崎にある聖母の騎士園の施設に引き取られました。晴美さんは間もなく洗礼を受け、13歳になると長崎の小神学校に入学しました。

それ以後はまっすぐ神を見つめて歩み、東京の王子大神学校を経て、ローマのセラフィム大学神学部で勉学に励まれました。しかし学業半ばで病に侵され、司祭への道を断念して帰国せざるをえませんでした。その後は神学校でラテン語を教えたり、長崎の聖母の騎士園や仁川学園、海星女学院で教鞭を取ったり、事務職についたりして一家を支えました。それとともに池田教会では、広報、会計係、納骨堂係などの仕事を長年にわたって引き受け、誠心誠意、心をこめて働いてくださいました。谷掛晴美さんは池田教会の信仰を支える大石の一つでした。

１０月のガラスケースのみことば

いつまでも残るものは信仰と希望と愛です

第一コリント 13･13

（福音宣教委員会選）

10月の年間行事予定の変更･追加

10/ 4　子どもの初聖体
10/11　日曜学校の始業式
10/18　社会活動委員会のミーティングを中止
10/24　日曜学校の合同お泊まり会中止
10/25　大人の日曜学校と研修委員会を中止

今月の表紙写真について

４月から始まった聖堂の耐震工事が、８月末に完了し、聖堂は美しい姿を現した。壁にははしご形の補強柱が入り、安全性が確保された。白く塗り替えられた壁が日光に映える。夜には道路側の高い窓から色とりどりの光が漏れて、通りかかる人々を招き入れるかのようだ。この聖堂が池田地域の祈りの場となりますように。株式会社N2設計辰巳清一さん撮影。

黙想会のお知らせ

宝塚黙想の家

■日帰り黙想会
10月22日(木)10:00～15:30
指導：染野治雄 神父
10月23日(金)10:00～15:30
指導：山内十束 神父

各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。　☎0797(84)3111

典礼委員会から注意喚起のお願い

■最近ミサ中に携帯電話等が鳴っていることがあります。今一度ミサ前に、携帯電話の着信音の停止か電源を落とすなどを行ってください。

■聖書と典礼などの座席に置いてあるパンフレット等は持ち帰ってください。ミサでの再利用はしません！

編　集　後　記

2018年の6月18日の朝に起きた「大阪府北部地震」は池田における震度は５弱であったが、聖堂の天井近くの数枚の窓ガラスが破損し、一部の破片は無人の聖堂床に落下した。建築後すでに５２年も経過して、経年歪が加わり、新しい建築基準に適合しなくなっていたのだ。

ガラスを有機ガラスに取り換えるなどの緊急工事を行うために、計3回の主日ミサは仮聖堂をカール記念館に移して行われた。一方、直ちに設置された耐震委員会は建築設計会社N2に耐震診断と耐震工事の立案を依頼し、耐震診断に基づいた耐震工事概要は昨年6月の信徒総会で承認された。詳細な設計案が耐震委員会とN２との協議によって作成され、工事業者の入札が行われて、コーナン建設による工事が開始されたのはコロナ禍で公開主日ミサが中止されていた本年４月末であった。主日ミサが三密を避けて再開された6月には、聖堂はカール記念館に移されていたが、8月末には耐震工事が完工し、８月29日(土)に新聖堂で主日ミサが挙げられるまでに半年が経過していた。

耐震工事の施工には耐震工事委員会と総務委員会、財務委員会が連携して対応したが、コロナ禍を防ぐために三密を避けた評議会の活動は基本的に停止されていたために、評議会役員やいくつかの常設委員会有志による協力体制が欠かせなかった。また、カール記念館の工事費用の借入金の返済後から今日までの信徒による設備費献金の提供がなければ決して成しえない大きな事業であった。

設計会社と施工会社との交渉を頻繁に行いながら、新聖堂を紹介する記事や聖堂リニューアル工事の進捗状況の報告を幾度も快く引き受けて頂いた。適うものなら任に当たった方々と共に「乾杯！」と叫びたい。　インマヌエル